

## 英米文学科主催 講演会のお知らせ

久野陽一教授が担当される「イギリス文化特講 II」において、ゲストスピーカーをお招きして講演会を実施します。受講生以外の学内・学外の方の参加も歓迎いたします。事前の予約や参加費は必要ありません。皆様のご参加をお待ちしております。

**題目： 21 世紀のジャズとポストブラックネス**

**講演者： 柳樂 光隆 氏 (Jazz the New Chapter)**

**日時： 2024 年 12 月 19 日(木)5 限(16:50~18:20)**

**場所： 17 号館 3 階 17308 教室**

### 講演内容：

私が音楽雑誌に書き始めたのが 2008 年。そろそろ 16 年ほどになる。その間に 1000 本以上のインタビューを行ってきた。

私の専門はジャズなので主にジャズ・ミュージシャンへのインタビューが中心だった。おそらく 95%以上がジャズ・ミュージシャンだったと思う。その中でも主にアメリカのジャズ・ミュージシャンが多く、その中でも黒人が圧倒的に多かった。同世代のロバート・グラスパーやホセ・ジェイムスらのインタビューが上手くいったこともあったとは思いますが、その後もほとんどが黒人のミュージシャンだったと思う。少なくとも僕がこれ間にやってきた取材の 7 割くらいは黒人だろう。16 年、主にアメリカの黒人ジャズ・ミュージシャンの話を聞いてきたら、徐々に彼らのコミュニティから歓迎されるようになってきた。そして、少しずつ深い話が聞けるようになってきた。

ちなみに私がライターをやっていた期間はアメリカのジャズが大きく動いた時期だった。2012 年にバラク・オバマが大統領になり、2016 年にはドナルド・トランプが大統領になった。2012 年にはブラック・ライブス・マターが起こり、2020 年には全米各地で大きなデモにも発展した。2024 年、再びドナルド・トランプが大統領に返り咲いた。

その間、アメリカの黒人たちが奏でるジャズの形は変わっていった。そして、彼らがジャズに委ねる思いや物語も変わっていた。そして、アメリカの動きに呼応するように、もしくはアメリカの動きから触発されたようにイギリスやブラジル、アフリカでも変化が起こっていった。表現したいこと、主張したいこと、作品の中に記録しておきたいこと、そういったことが社会の情勢が刻々と変わる中で、大きく変化しているようにも感じた。少なくとも公民権運動に触発された 1950-1970 年代のジャズの表現や主張とはかなり異なるものになっていることは間違いないと僕は思っている。そうすると参照される先人のリストも変り、影響源とされた先人の評価や歴史的な意義は変わってくる。その変化は粛々と歴史を書き換えている。ぼくはこの 16 年、そんな話をずっとジャズ・ミュージシャンたちから聞いていた。

この講演で過去に登壇した際にはイギリスにおける黒人ジャズ・ミュージシャンたちの歴史をテーマにしていた。カリブ海やアフリカからの移民たちが自身のルーツに紐づいた音楽をジャズに取り込んでいく過程について話すことで、イギリスのジャズにとって移民たちの影響がいかに大きいのかを知ってもらおうとした。

今回はそんなイギリスにおけるジャズ史を踏まえ、2010 年代以降、世界中の黒人のジャズ・ミュージシャンたちがどんな音楽を奏でてきたのかについて、私が実際に彼らから聞いた話を引用しながら解説する。世界の流れとイギリスのシーンがどのようにリンクしているかを知ることはこの 10 年で一気に世界的に知られるようになったイギリスのジャズの成功の理由を知ることに繋がるはずだ。「アフリカン・ディアスポラ」、「脱植民地主義」といった話がテーマになると思う。イギリスにおける黒人の在り方を知るためにもそういったテーマは欠かせないと僕は思っている。

#### 講演者プロフィール：

1979 年、島根県・出雲生まれ。ジャズとその周辺の音楽を扱う音楽評論家。21 世紀以降のジャズをまとめた世界初のジャズ本『Jazz The New Chapter』シリーズ、マイルス・デイヴィスを現在の視点から読み解いた『Miles Reimagined』の監修を務める。共著に後藤雅洋、村井康司との鼎談集『100 年のジャズを聴く』などがある。『WIRED』日本版、『i-D JAPAN』『CD ジャーナル』『JAZZ JAPAN』『ミュージック・マガジン』『BRUTUS』『ユリイカ』などの雑誌にも寄稿。ジャズに留まらず、数多くのライナーノーツも手がけている。『Jazz The New Chapter』シリーズのコンピレーション CD などの選曲家としての仕事も多数。現在、鎌倉 FM「世界はジャズを求めている」(毎月第 3 木曜日) 放送中。また、美学校、昭和音楽大学大学院などでも教鞭を執る

お問い合わせ先：文学部英米文学科研究室